

ツキガイモドキ *Lucinoma annulata* (Reeve)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されるが、個体数は少ない(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。

本種は潮間帯には生息せず、やや深い潮下帯に生息するため、新生堆積物量の増加に伴う無酸素層発生の影響を受けている可能性が高い。本種は水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされている種と考えられる。

【形態】

殻長約 30 mm で、殻は類円形で膨らみは弱い。殻表は間隔の広い板状の輪肋がある。殻は白色であるが、生時や新鮮な死殻には茶褐色の殻皮がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

東シナ海、日本海、南西北海道以北、アラスカ、カリフォルニアの水深 25-

670 m の砂泥底に分布(松隈, 2017)するとされているが、県内では三河湾、伊勢湾の水深 20 m 前後の砂泥底でのみ生息が確認されている。また、渥美外海から熊野灘の 1000 m までの調査でも、本種は死殻すら採集できず(木村・木村, 2017 など)、前述した本種の著しく広い分布域は近似種を混同している可能性がある。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

レッドデータブックなごや 2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の生貝標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では産地不詳の標本に差し替えられている。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの大きな資料(データ)で、さらに本種は分布域、分類学的な検討が必要な種でもあり、特に産地不詳の標本は図示しないことが望ましい。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2010. ツキガイモドキ, p. 214. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. ツキガイモドキ, p.456. in: レッドデータブックなごや 2015, 503pp. 動物編. 名古屋市環境局.
木村昭一・木村妙子, 2017. 軟体動物門. in: 木村妙子・木村昭一・自見直人・角井敬知・富岡森理・大矢佑基・松本 裕・田邊優航・長谷川尚弘・波々伯部夏美・本間理子・細田悠史・藤本心太・倉持利明・藤田敏彦・小川晟人・小林 格・石田吉明・田中 颯・大西はるか・縮次美穂・吉川晟弘・田中正敦・榎田優花・前川陽一・中村 亨・奥村順哉・田中香月(著) 三重県熊野灘の深海底生生物相. 三重大学フィールド研究・技術年報 16: 5-7, 17.
松隈明彦, 2017. ツキガイモドキ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 559, 1218. 東海大学出版部, 平塚.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10-12.

(木村昭一)



名古屋市名古屋港沖(コアサンプラー水深 15 m), 2009 年 5 月 30 日, 木村昭一採集